

どうするヨナ

代務牧師 齋藤 篤

聖書 ヨナ書4章1～11節

- 1:このためヨナは非常に不愉快になり、怒って、
- 2:主に訴えた。「ああ、主よ、これは私がまだ国にいたときに言っていたことではありませんか。ですから、私は先にタルシシュに向けて逃亡したのです。あなたが恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方であることを私は知っていたのです。
- 3:主よ、どうか今、私の命を取り去ってください。生きているより死んだほうがましです。」
- 4:しかし、主は言われた。「あなたは怒っているが、それは正しいことか。」
- 5:すると、ヨナは都を出てその東にとどまり、そこに小屋を作り、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。
- 6:神である主がとうごまを備えた。それはヨナを覆うまでに伸び、頭の上に陰を作ったので、ヨナの不満は消えた。ヨナは喜び、とうごまがすっかり気に入った。
- 7:ところが翌日の明け方、神は一匹の虫に命じてとうごまをかませたので、とうごまは枯れてしまった。
- 8:日が昇ると、神は東風に命じて熱風を吹きつけさせた。また、太陽がヨナの頭上に照りつけたので、彼はすっかり弱ってしまい、死を願って言った。「生きているより死んだほうがましです。」
- 9:神はヨナに言われた。「あなたはとうごまのことで怒るが、それは正しいことか。」ヨナは言った。「もちろんです。怒りのあまり死にそうです。」
- 10:主は言われた。「あなたは自分で労することも育てることもせず、ただ一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまをさえ惜んでいる。
- 11:それならば、どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから。」

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

今日は、神によって「裁きの言葉」を伝えるよう命じられた、ヨナという人物について書かれた「ヨナ書」の終わりの部分から、皆さんとともに神の言葉に聴いてみたいと思いますが、そもそもヨナの身の上に何があったのかということから、最初に触れてみたいと思います。

聖書、特に旧約聖書では、神からのメッセージを預かって、それを人々に伝えるという「預言者」という存在と、その務めやエピソードについて書かれたものが実に多くあります。旧約聖書の後半部分には、イザヤから始まって、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルと言った、いわゆる「4大預言者」と言われる人々たちによる活動が記されています。どの預言書にも共通するのは、人々が神に背を向けて、反抗して、神のご意向というものを無視しようとして歩んだ姿に対して、預言者が立ち上がって神による「裁きの言葉」を伝え、人々に警告を与えるというものです。そして、裁きの警告が現実のものとなって、人々は自分たちの生活の場が奪われて、苦しみを経験しなければならない。しかし、そんな人々を神は、ご自分の愛と憐れみをもって、慈しまれることで、人々に回復と祝福の場を再び与えられる、というものです。

預言の目的とは、裁きと人々の滅びを第一とするよりは、神があくまで人々を愛し、その愛を受け取るにふさ

わしいとは到底思えない人々に対しても、その愛を貫くという、神の姿というものを人々に知らせるところにあります。この神の愛によって、人々はどの時代も、神によって生きるということの意味と幸いというものを確認し続けてきたのです。それは、現代に生きる私たちについても、同様の経験があると言えるでしょう。聖書を通して、神からの言葉、メッセージというものが与えられて、それを私たちが預かるときに、慰めや励ましというものを受けて、それによって生きる希望を見いだすことができる。まさに、神からの「預言」というものを通して、私たちは神の愛というものを確認することができると言えるのです。神が与える前向きな思いというものを、私たちが共有するならば、神の愛が私たちのうちに平和というものを宿して、私たちはその平和によって豊かな生活が営めるようになる。そのように私たちが促してくださるのは、神御自身に他ならないのです。

そして、旧約聖書には、4大預言者による記録の他に「小預言書」と呼ばれる、12の書物が収められています。その小預言書のひとつに「ヨナ書」があります。登場人物は、ヨナ、神、そして、裁きを伝える相手である、ニネベというところに住む人々です。神がヨナに対して、裁きを伝えるように命じられたのは、ニネベの住民でした。

しかし、ヨナは最初、この神からの命令を拒みます。人々に裁きの言葉を伝えるなど、ヨナにとっては是非とも避けたいことだったのです。あえて人々が神からの怒りを買うようなことを伝えるなど、どれだけニネベの住民から憎まれ口をたたかれることになるか。ヨナはある程度想像できたのでしょう。だから、ヨナはニネベとは逆方向の場へ逃げようとします。逃げること、避けることで、その務めから離れようとする。そんなヨナの気持ちを、私は十分に理解できます。少しでも苦しみから逃れたいと思うのは、誰とて同じなのではないか。そうおもえてならないのです。

そんなヨナに対して、神はその逃げ道となる海の上で嵐を起こさせます。荒れ狂う嵐に翻弄される船は沈みそうになります。ヨナは、この嵐は神が起こしたものと悟ったのでしょう。観念して自分自身を海へ放り込むよう、同じ船に乗っていた人々に頼みます。こうして、ヨナは嵐の海に放り出されます。しかし、神はヨナを大きな魚に飲み込ませて、ヨナは三日三晩、魚の腹のなかに守られます。ヨナはそのなかで、神に祈りをささげました。自分自身が、神から愛され、守られているのに、どうして逃げようとしたのだろうか。神によって怒りを買ひ、裁かれ、滅ぼされるべきなのは、私自身ではないか。しかし、神は現に、そんな私を魚の腹に収めて、命を助けているではないか。

ヨナは、神の愛と慈しみというものを実感します。神は、そんなヨナの思いを理解して、ヨナを魚の腹から嘔き出させて、地上に放り出しました。こうしてヨナは、ニネベに神から預かった言葉を携えて向かう決心が与えられました。そして、ニネベの街で神の裁きの言葉というものを伝えたのでした。その結果、ニネベの王はその裁きの言葉を受け入れて、街中の人々に対して、これまでの歩みをざんげして、改めて人生を歩むように命じました。こうして、ニネベの住民は、神からの怒りというものを買わずに済むようになりました。

ここまで聞けば、実にハッピーエンドで終わる話なのです。しかし、なぜか、預言者ヨナはそんなニネベの状況に対して怒りの感情を抱いたのです。それが、先ほど読まれました4章で描かれている内容なのです。

ヨナは神に怒りをぶつけます。あなたがニネベの人々を救う気持ちがあるのならば、そもそもこの私をニネベへ向かわせる必要はなかつただろうに。私を魚の腹に飲ませてまでいろいろ考えさせて、私をニネベに向かわせて、伝えたくもない裁きの言葉を人々に伝えなくても、最初から神様、あなたがニネベの人々に愛を注がれば良かったのですよ、神様。

ヨナにとっては、おそらくですが「貧乏くじ」を引かされたような思いになったのかもしれませんが。私がここまで自分を犠牲にして、人々に裁きの言葉を伝えたのだから、そう簡単にニネベの人々が救われたら、ここまで味わった私の苦勞というものは、どうなるのだろうか。せめて、私が味わった苦しみの方を、ニネベの人々も味わなければ、この私が報われないではないか。ヨナが発した怒りとは、そういうところから来たのではな

いか。私はそう思えてならないのです。

なんとヨナは心の狭い、底意地の悪い人間だろうかと思うかもしれません。しかし、自分の苦痛というものが報われないときに、私たちは、その苦しみを分かって欲しいと思うばかり、他者に対しても同じことを要求してしまうということがないでしょうか。あの人がいとも簡単に幸せを手にする姿を見て、許せないと思う経験がもしあるとするならば、そこに、ヨナが感じた怒りというものと根というものを、私たちは抱いていると言えるでしょう。実は、このようなことは、私たち人間の生活のなかでは、意外にもよくあることなのかもしれません。幸せを喜ぶべきなのに、喜べない。自分の苦労と比較して、不公平な気持ちにさせられるのです。ヨナは、神に対して、なんとあなたは不公平な方なのだろうと、自分の満たされない気持ちを率直にぶつけました。

そんなヨナに神は言われました。「あなたは怒っているが、それは正しいことか。」(4節)

ヨナは、照りつける日差しゆえに、暑さのあまり、そして自分の怒りゆえに、どうしようもない気持ちにさせられました。だから、日差しを避けるために、小屋にこもりました。そして、神はヨナのために、とうごまの大木を備えて、そこに日影をつくり、ヨナを休ませることによって、彼自身の不満を解消させました。こうして、ヨナは自分の怒りをおさめることができました。

しかし、その安心も長く続かなかったのです。神はとうごまの木を一夜にして枯らせてしまうことによって、ヨナは再び灼熱地獄を味わわなければならなかった。ヨナの怒りは再燃しました。再び神にその不満をぶつけました。そんなヨナに、再び神は問われます。「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか」(9節)。その問いに対して、ヨナは「もちろんです」と答えます。

そのようなヨナの怒りに、神はこのように応えられました。

「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」(10～11節)

ヨナが「正しい」と思っていた、自分の苦労がないがしろにされたゆえの怒り。しかし、神はヨナをないがしろには決してなさらなかったのです。神は逃げるヨナ、苦しむヨナに、なんのためらいもなく命を助け、休息を与えられました。ヨナはそのような自分自身の経験を棚に上げて、ニネベの人々のことをあれこれつぶやき、彼が救われることに文句をつける筋合いも理由もありませんでした。

そんなヨナに、「あなたは正しいのか」と問われる神がおられます。私が正しいと思っているがゆえに発する怒りは、本当に正しいものだったのか。私たちは、神がご自分の愛と憐れみを人々に与えられることを通して示された「ご自分の正しさ」というものを目の前にして、自分自身のうちに怒りの感情があるのであれば、その怒りというものに向き合うことの大切さというものを、ヨナと神とのやり取りから、是非感じ取っていきたいのです。

祈り

愛と憐れみをもって、正しさを私たちに与えられる神、
私たちのやるせない思い、満たされない気持ち、それゆえに起こる怒りというものをすべてご存知なあなたが、
私たちの命を、生活を幸いなものへと導いてくださることを信じます。

あなたのそのような愛を受け取るがゆえに、私たちのうちに宿る平和を愛する者にならせてください。

愛の主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。

アーメン。